

巖山河

第三號

平成2年5月25日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

沼津牧水会の足跡	2
玉城徹先生と本を読む	8
第36回・沼津牧水祭	
短歌大会	10
碑前祭・芝酒盛	12
サロン音楽の夕べ	13
第2回・雛の歌会	14
筆跡による牧水周辺展	16
定款・後記	18

沼津牧水会の足跡②

沼津牧水会三十年の足跡を記述する意味は、地方における小集団が、人間的な関わりを深める中でいかなる活動をしたか、その業績はどうであったかを分明にし、顕彰するための作業でもある。三十年の歴史は当然のことだが無数のドラマの積み重ねであった。もともとこの会の行動主体となるものは「沼津牧水祭」という名前の、優雅典麗な「まつりごと」の中にあつた。そこは、人間相互の信頼と友情を核にしてまとまつた、おのずからなる自由広場で、権力や抑圧の埒外に置かれ、独自の穏やかな空気にみちていた。文中にしばしば登場する、露木豊、麻生鋭、積惟勝、杉山賢二、伊藤祐輔、田中旭ら、この著名なる文人たちは、存命中はいかなるときにも会の中心に座っていて、しかも見事な脇役であつた。沼津牧水会が長年にわたり多くの優れた人材を抱え、明るい行動的な集団として地域の「一隅の灯」であり得たのは、この先人たちが培った知性に守られてきたからである。

香貫山に歌碑建立

昭和三十五年九月

歌

香貫山いただきに来て吾子とあそび
ひさしくをれば富士はれにけり

除幕式

九月十八日午前十時

(牧水三十三回忌)

建立者

沼津商工会議所・商工観光部会

会頭 岡田 吾一

観光部会長 大川角太郎

書体

丹沢紅嶺氏(観光部会副会長)が遺品の詩文の中から筆跡を集め、数年かけて組み立てた苦心の作。

碑石

高さ三メートル・幅〇・六メートル
短冊型の自然石。

沼津にゆかりの深い若山牧水の新しい歌碑が、香貫山香陵台に建てられた。歌碑は高さ三メートルの細長い根府川石に『香貫山いただきに来て吾子とあそびひさしくをれば富士はれにけり』の一首を刻んだもので、『八月中旬、東京を引払いて駿河沼津在なる楊原村香貫山の麓に移住す』という頭書がついている大正九年の作品である。

牧水は本名繁、明治十八年八月二十四日宮崎県東臼杵郡東郷村に生れ、昭和三年九月十七日沼津市千本浜の松かげの家で歿するまで、松と酒とを愛して幾多の絶品を残した平民歌人で、『唯いっしんに自分の心を視よ、心の底

を視よ、其処の清さを見よ、深さを見よ、其処にのみ歌は在る』と強調している。

千本松原に建っている『幾山川……』の歌碑とともに、この新しい歌碑もまた、沼津を愛する人々のよき記念像となるであろう。

海見ると登る香貫の低山の小松が原ゆ富士のよく見ゆ

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山

(文・麻生 鋭)



〈牧水碑と喜志子未亡人

昭和三十五年九月十九日沼津朝日

第八回 沼津牧水祭 昭和三十六年

主催 牧水顕彰会・沼津市教育委員会

○碑前祭 九月二十四日午前 千本公園

初秋晴天のすがすがしい浜風の松籟の裡に心静かに行われた。(大林記)

○短歌大会 九月二十四日午後一時より浅間神社

社務所にて、投稿・百二十八首、当日出席者八十名。

選者に久方寿満子氏、積惟勝氏、伊藤祐氏。

入賞作品

牧水賞

心屈して帰り行く夜半握りゐる釣草のひそかな傷を愛せり 高嶋 健一

喜志子賞

若き等の会話聞きつつフト吾の心の位置をたしかめて見る 山下とし子

市長賞

薄氷をふみゆくおもい子の余命知らされし夜の刻うつりゆく 杉山 杏子

議長賞

癒ゆるなき我と知りつつ生き抜けと握りたる君の温き掌忘れず 守屋三郎

教育長賞

たわやすく人を信じて背かれし少年囚はひよく訴う 上松 蓮

観光協会賞

風紋の移る砂丘に白晒されて凝固している目的のなき貌 塩谷 義明

県教育長賞

妻も子もなき叔父を憐めば皺深き掌に紙幣握

らす 芹沢 初子

○牧水遺墨展 十月十三日より十七日まで

西武デパート五階

掛軸 三十八点・原稿 四点・色紙 八点

短冊 十七点・扇面 二点・屏風 一点・喜志子書簡・徳利・拓本ほか。

(參觀者に高校生熱心な姿が目立ち、成功裡に幕を閉じた)

○前夜祭 九月二十三日夜、市場町公民館

この催しについて大林栄一氏は「沼津朝日」十月二十一日号に「牧水雑感」として次の一文を寄せている。

今年の牧水祭も終った。従来牧水祭についてある一部の人々から批難めいた色眼鏡で見られていた。それは極く特殊な限られた人達だけの牧水祭だというものようだった。これに応えて、今年は市民一般のものにしようという念願から有識者、文化人は勿論のこと商店街の人達まであらゆる階層の人々に呼びかけて、炎暑八月の頃から計画、立案され研究され尽した感があった。それらの案は九月中旬迄数回にわたって検討された、そして次のように実行されたわけである。

九月二十三日前夜祭、九月二十四日碑前祭と歌会、十月十三日から遺墨展、この行事の間幸いにも好天に恵まれ続けた。しかし行事は悉く成功したとは言えないものがあった。

殊に前夜祭のごときは、PR不足の点もあったが、沼津の人達のこういう文化的なものへの関心の薄さという冷淡さというかそれはむしろ無関心に近い姿を見せつけられた気がし

た。これは地方都市の持つ欠点でもあるのだが当事者の方にも反省しなければならぬいくつかの重大点もあるようで、来年はもっとよくなるだろうと期待したいものである。

第九回 沼津牧水祭 昭和三十七年

○碑前祭 九月十六日午前 千本公園

挨拶・井手けい子氏。献花・日大三島高校一年浜野祐子さんほか七名。献酒・井手けい子氏。祝辞・工藤教育長。

○短歌大会 九月十六日午後一時より浅間神社

務所にて。投稿・八十四首、当日出席者・六十名。

入賞作品

牧水賞(若山喜志子選)

東京の大病院を懂れて辞めゆく君にきびしき残暑 齋藤 俊夫

市長賞(互選)

なだらかな稜線冴えて暮れ初むる晩夏の富士は大き位置しむ 羽田寿恵子

教育長賞

何がため砲は撃たれる富士の野にたまさかに来て聞かざる音 久田 二郎

議長賞

遠鳴れる雷きき乍らどくだみの強く匂える掌をあらいいぬ 上松 蓮子

選者団賞

鎖ひきて腹這う犬の黒き目に限りなく蒼き空の映れる 吉添 普子

その人は吾にのみカメラ向けいしとうら若き

君はほほ染めて云う 青木 初音

父の遺言しかと受けとむ夜の更けを冬の終りの雪が降り積む 大岳きち子

若き日の父の凶案の徽章つけし生徒らがのり来ぬふるさとに近く 杉山 杏子

盲目の魚のいとしさよ物体にあたれば避けてまた泳ぎゆく 山城 襄

○月下祭 九月十六日午後六時より香貫山香陵台にて。名月のもと秋の夜の詩情を味いながら牧水を追慕した。

○短歌文学散歩 昭和三十八年五月二十五日

主催 沼津朝日、黎明新聞社

参加者十二名にて葦山付近を散策。江川邸、反射炉、蛭ヶ小島などを巡って源平のむかしを偲び、葦山公民館において歌話を催す。

第十回 沼津牧水祭 昭和三十八年

○碑前祭 九月十六日午前 千本公園

献花・日大三島高校女生徒。朗詠・田中要吉、

献酒・若山喜志子。五十名の参加者に行楽客も加わり、碑前に酒肴の用意をしてひととき

を楽しむ。この日の喜志子夫人談「主人の歌を彫った碑の文字も、今では手で触らなければ

はつきりしないほど風化し、三十五年の年月がいまさらのように長く思われる。」

○短歌大会 九月二十九日午後一時より沼津市文化会館。投稿・百四十五首。

入賞作品

牧水賞(若山喜志子選)

治療終えてふとやすらぎを示すかに虚空を見

つむる義眼瞬たく 斎藤 俊夫

市長賞(互選)

弁解の言葉を探しているならむ背をむけて子が手を洗う間長し 青木 朝子

議長賞

交渉のめはながつきて飲むジュース水片の角 佐々木青史

徐々に溶けゆく

教育長賞

潮たるる蛸下げて来る漁夫にあう松透く陽ざしの白き浜道 杉山 杏子

第十一回 沼津牧水祭 昭和三十九年

○碑前祭 九月二十七日午前 千本公園

献酒・献花・若山喜志子。ほかに朗詠等。

(この時の催しに協力した人々(敬称略))

大林栄一、川口和子、羽田寿恵子、上田みち

江、久田二郎、神田キヨ子、杉本智春、上田

治史、佐藤茂正、東京麻糸学院生徒、上松蓮

佐野つる、米山美智子、杉山杏子、谷内芳子、

佐々木青史、麻生悦子、後藤富士子、四方一

渚、飯塚正己、渡辺靖之、稲村政子、居山郁

子、山田清子、武田房子、三浦征江、伊藤み

ち、芹沢初子、青木朝子

○遺跡の保存牧水会で決める

沼津牧水会は九月二十七日の牧水祭打合会

を二十日午後二時から文化会館で開き、牧水の遺跡保存、年二回ぐらいパンフレット発行

など決め、九月六日午後二時から文化会館で

再度打合会を開いて牧水祭の具体的行事計画

を決める。

なお当日、理事に林輝彦(会長)大林栄一、

羽田寿恵子、井手けい、芹沢初子、麻生鋭、

伊藤祐輔、上田治史、田中旭、土屋秀夫、谷

内芳子、二橋正夫氏を選任このほか市内文化

団体から若干名選任する。

昭和三十九年八月二十二日

(沼津朝日より)

第十二回 沼津牧水祭 昭和四十年

○碑前祭 九月二十六日 千本公園

献酒・井手けい子氏。献花・ルンビニ幼稚園

児。挨拶・林輝彦会長、工藤教育長。朗詠・

大悟法利雄、田中要吉氏。

○牧水を偲ぶ会 乗運寺本堂

出席者 七十名

大悟法利雄氏、鈴木秋灯氏、塚田医師を加

え、かかれていた思い出話に花が咲いた。

司会 田中旭氏、丹沢氏の「牧水スライド」

披露と共に朗詠。

○十里木散策 十月二十四日

参加者八十名、会費三百円。

鈴木秋灯氏の案内で富士山と十里木高原の

情趣、大悟法利雄氏の朗詠、地元への歓迎と盛会で

あった。

紀行随筆「静かなる旅をゆきつつ」より富

士裾野の三日を抜きパンフレット(二十頁の

小冊子)にして十里木行の諸氏に配布する。

○短歌会 九月二十六日午後一時三十分

大手町会館

主催、沼津牧水会。後援、静岡県歌人協会、

山脈短歌会、東海短歌会、沼津市教育委員会、講師、積惟勝、大林栄一、伊藤祐輔、大悟法利雄、大岡博。投稿・百四十一首、当日出席者・八十八名。一首につき百円。

司会 上田治史、谷内芳子

入賞作品

湯をはじめ具すさまじきさまに煮ゆべトナム
記事に怒れる夕べ 堀内 裕子
市長賞

風立てば風の中にて身を撓わせ蒼然として竹
のそれぞれの音 上田 治史
市議会議長賞

片隅へ静かに掃かるる思ひにて窓に華やぐ青
葉見て居り 森崎 正明
教育長賞

精一杯生きたるしるしの一つなり手にせる土
地権利証の文字は大きく 岡 秀
山脈賞

秋づける風にカリンの青き実がゆれいる下を
看護婦が来る 杉山 杏子
東海短歌賞

稲の花かすかに揺るる小径にて夕光長くたも
つ平穩 高島 久子
山脈賞

秋風賞 青木 朝子・大川やえの
砂丘賞 上田みち江
樹木賞 上松 蓮

冬空賞 須永 秀生
小松ヶ原賞 武田 房子

深雪賞 飯塚 正己

第十三回 沼津牧水祭 昭和四十一年

○碑前祭 十月二日午前十時 千本公園

台風二十八号の余波を受けびしょぬれの準備。参加者四十名、献酒・石井岬。千松閣に於いて石井岬さんの「父の想い出」も開かれた。



〈牧水碑に酒をふりそそぐ長女の岬さん〉

昭和四十一年十月沼津朝日

○短歌大会 十月二日午後一時より文化会館ホー

ルにて、司会・須永秀生、選者・若山喜志子、大悟法利雄、積惟勝、伊藤祐輔、投稿・九十三首、当日出席者・七十余名。

入賞作品
牧水賞(若山喜志子選)

内職の依頼は軽くうけながしクラス会の女社長華やかに笑ふ 後藤富士子

市長賞(互選)

きりかえす耕土に埋もるわが足に熱く地熱の
しみとおくる 小島あき子

議長賞

いつとなし背を曲げているが気安くてとがめら
れつつ厨に芋むく 影山 千敏

教育長賞

笹に干せる梅干に白き塩ふきて真夏の昼間ひ
そと音せず 岡 秀

山脈短歌賞

父の古き辞令にまじり紙魚の食いしわが出生
届の下書が出づ 杉山 杏子

東海短歌賞

夫癒えて預けおきたる子を背負ひ帰りし駅よ
冬富士澄める 秋山 静子

選者賞

曾根恵美子・武田 房子
○明治、大正、昭和三代文芸展
一月二十五日〜二月十日・マルトモビルほて
い屋ホールにて。主催・沼津牧水会、後援・
県、市教育委員会。

明治百年を記念して明治、大正、昭和の時
代に活躍した作家、歌人、詩人約五十人の直
筆の短冊、色紙、かけもの、手紙など二百五
十余点が展示され参観者で連日にぎわった。

この間、沼津朝日新聞言いたいほうだい欄
で一月二十六日 遠い雪 麻生鋭、一月二十
八日 めぐりあい 上田治史、二月二日 つ
り人沼津・牧水 池谷ゆう軒、二月四日 文
芸展雑感 土屋睦夫、二月六日 忘れ花 川
口和子とそれぞれの角度から達者な筆で文芸
展の模様や感想を伝えている。

○若山牧水生家保存・牧水記念館建設協賛会寄付

を募る 九月

募金額・六〇〇万円、一口千円

沼津関係発起人に井手けい子、宇野秀吉、塩

谷六太郎、杉山金次郎、杉山賢二、田中旭、

丹沢紅嶺、林輝彦氏らがいる。

第十四回 沼津牧水祭

昭和四十二年

○碑前祭 九月二十四日午前十時 千本歌碑前

献花・献酒・挨拶・石井岬。朗詠・大悟法利雄。参加者・八十名。市内婦人会有志の手踊りなど和やかなひとときが持たれる沼津市のひとつの風物詩的な印象をもって市民の中に沈潜しつつあるようである。後、青少年婦人会館に平野宏氏、長谷川禎一ら約三十名が石井岬さん親子を囲み歓談、来年四十年祭の計画など語られた。

○短歌大会 九月二十四日午後一時 文化会館

投稿・八十八首、当日出席者・八十名、司会・須永秀生、芹沢初子、講師・積惟勝、伊藤祐輔、大悟法利雄

入賞作品

牧水賞

釘打ちて仕事場にあそぶこの子らに縁なく終る家業かもしれぬ 青木 朝子

市長賞

徹夜作業を終えて直角に首垂れし屋上のクレインが朝日を反す 斎藤 俊夫

議長賞

達いて肩触れ合う時もパトカーのサイレンに

身構う記者なれば君

荻田 優子

教育長賞

装うも隠す術なき兼業を支うる妻の日焼けせし腕 田村 亀吉

東海短歌会賞

指輪など縁なくすぎて老いづきつつ風渡る原に新茶摘みおり 相川 ふさ

山脈賞

非武装地帯また失はれたりベンハイの川ゆるやかに流れいるところ 上松 蓮子

大悟法賞

友禅を蒸す匂い甘き紫野御所田町の坂下りゆく 杉山 杏子

牧水祭案内の中で牧水会ではこの行事を伝統的な沼津市の秋の名物行事として続け、市民の心の糧となるよう育てて行くことを計画、来年は牧水四十年忌を迎えるので特別な趣向をこらした記念行事を考えることになっている。

○パンフレット・ちらし配布 昭和四十二年八月二十七日(沼津朝日より)

沼津千本松原若山牧水(文責・上田治史)若山牧水の歌、牧水略歴(抜粋・伊藤祐輔)

第十五回 沼津牧水祭

昭和四十三年

○碑前祭 九月二十九日午前十時 千本歌碑前

献酒・挨拶・若山旅人。献花・石井岬。

(その後若山家におかれては八月十九日に死去された喜志子夫人の追悼会と埋葬を千本山乗運寺で催された。)

○短歌大会

九月二十九日午後一時 乗運寺新本堂にて、当日出席者・九十余名、投稿・百十二首(二百円)、司会・芹沢武男、渡辺靖之、講師・積惟勝、伊藤祐輔、来賓・大悟法利雄

安池敏郎

入賞作品

牧水賞

そむき嫁く娘を語るまじ更けし夜を我がね返るに夫も寝がえる 林 よし子

市長賞

レタスの移植済みシタベを雨降れば夫活々と地下足袋洗ふ 杉本 寿子

教育長賞

受け入れぬ輸血が管に淀み居りつまの呼吸の今は幽けく 渡辺 伝

市議会議長賞

青きあみ戸をとる光に背き臥す昨夜の悔いある胸をこごめて 杉山 杏子

沼津朝日賞

古雑誌一日束ねし掌の縄に擦れしがいねて熱もつ 秋山 静子

山脈賞

壊れたる自転車のハンドルつかめる少年みなしことなりて青空(ベトナム) 後藤富士子

東海短歌賞

「試験恐怖症」とさりげなく云ひし子の限界 松村千代子

またも思ひぬもの濯みて

史跡めぐり 九月二十九日

短歌会と併行して午後一時、参加者百二十名貸切バス二台に分乗して出発。解説・沼津女子高校教諭、小野真一と市教育委員会、川口

子

子

子

一磨、六代松、神明塚、松陰寺、興国寺城、愛鷹スカイライン通過、願成就院、佐野美術館、大手町沼津兵学校跡、この間約三時間。

○牧水ゆかたを作る 八月

男物、女物牧水の歌が染めぬかれています。田中旭氏のお世話で実現。

○「牧水写真帳」大悟法利雄出版。

昭和四十三年十月二十七日大悟法氏を囲んで麻生鋭宅で「牧水写真帳」の販売について、史跡巡りのスライドの試写。出席者・田中旭、井手けい子、大悟法利雄、麻生鋭、上田治史、川口和子、羽田寿恵子、青木朝子、川口一磨、十月三十一日沼津朝日新聞木曜インタビューで紹介される。

○短歌シンポジウムと短歌大会開催 十一月

主催・新日本歌人協会東海支部、後援・東海短歌会、新日本歌人、短詩形文学第十五回牧水祭運営に協力した人々 順不同
田中旭、小野真一、麻生鋭、中村博、露木豊、池谷忠寛、林輝彦、上田治史、杉山賢二、井手けい子、芹沢初子、丹沢紅嶺、川口一磨、若山旅人、大林栄一、川口和子、積惟勝、佐藤茂正、羽田寿恵子、後藤富士子、板垣晴巳、高島尚子、渡辺靖之、池田幸枝、遠藤永太郎、金子安夫、渡辺(市役所)、青木朝子

第十六回 沼津牧水祭 昭和四十四年

○碑前祭 九月二十八日午前十時 千本歌碑前
献花・石井岬 献酒・挨拶・若山旅人。朗詠・大悟法利雄。踊り・沼津民謡会。

○日本人の心のふるさと足柄の古道散策

九月二十八日 午前十一時 千本歌碑前貸切バス出発(会費六〇〇円)

小山町文化関係者のはからいで峠の足柄山城跡聖天堂へ若山旅人氏と共に、足柄峠を経て坂本へ下る道を足柄の古道といひ奈良時代から平安時代に官道として賑ったという。足柄城跡や新羅三郎義光の笛吹石をみて樹木におおわれた聖天堂を詣でる。

○短歌大会 十月五日午前十時三十分 文化会館

ホール(出詠料三〇〇円・昼食付き)
投稿・九十二首、当日出席者・九十余名、講師・積惟勝、伊東祐輔、佐藤茂正、大林栄一、司会・曾根耕一、芹沢初子
入賞作品
牧水会賞

退任式終えきし夫に昼の酒ぬくめおり胸に溢れくるもの 杉山 杏子

市長賞
力こめて書きたるならん身障の君の波うつ文字をみつむる 林 よし子

市議会議長賞
日雇の母を待ちわび眼る児に日暮れば寒しそつと衣を掛く 奈木 野一
教育長賞
疲れ果てし子の目に遇へりデモのこと学業のこと問はむとぞ来し 守屋 芳水

沼津朝日新聞社賞
耐ふることにつよき姑がベットにてわが掬ふ粥口あけて待つ 加藤りん子

積惟勝賞

ごぼう人參千切りの相談声高に通夜帰りの闇に聞ゆる 神田キヨ子

伊藤祐輔賞
納期せまり熱気のこもる作業場にフォークソングと軍歌入り交じる 寺田 桂子
山脈賞
晴ればれと心放てる一日よまなこつむりて煎薬を呑む 川本さく子

東海短歌賞
気安めの言葉云い出せず見えてしが立ち直るらし寡婦のくらしに 川口さかゑ

○「若山牧水と沼津」パンフレット配布

沼津朝日新聞八月十二日から二十日迄七回にわたり連載された郷土の文化史「若山牧水」の全文を転載したもの(変形A5版十八項)

○若山喜志子一周忌 千本山乗運寺にて
運営に協力した人々 順不同
井手けい子、芹沢初子、間藤(狩野川編集長)上田治史、田中旭、羽田寿恵子、池谷忠寛、青木朝子、川口和子、佐藤茂正、平野宏、大林栄一、杉山賢二、麻生鋭、渡辺靖之、後藤富士子、久田二郎、須永秀生、杉山杏子、林輝彦、小野純、金子安夫、辻美奈美、寺田桂子、板垣晴巳、秋元文江、新井愛子、曾根耕一、吉田千鶴子、積惟勝、大室文子、池田幸枝、川口一磨、工藤(市役所)

玉城徹先生と本を読む



○第一回 六月十七日・「日本の近代詩・透谷、藤村から蒲原有明へ」・参加者二十六名。

○第二回 七月十五日・「近代文学の自然感・二葉亭の翻訳『あひびき』そして蘆花・独歩」
・参加者二十一名。

「自然に対してどのくらい関心をおもちかということとは中々むずかしい問題なんです。東京で歌を作っている若い方には、もう自然なんかいいじゃないかと、都会生活を歌う、或は都会風景を歌うことが今の問題であつて、もう私たちは自然の風景に向かつて、何も感じ不起きない、歌なんか出来ないとおっしゃる若い方も居るくらいなんです。」

○第三回 八月十九日・「白秋と茂吉の散文」・参加者二十一名。

○第四回 九月二十三日・「手紙幾つか」・参加者十九名。

「今まで第一回は日本の近代詩の始まりのところをちよつと読みまして、それから第二回は日本の近代の自然観が、ツルゲーネフなんかの影響でどういう具合になつてきたかということを読み、それから、第三回は白秋と茂吉の散文と、こういうことで日本の近代文学といえますか、近代思想といえますか、そういうものの歩みが、どういう風に進んで来たかを多少感じて頂けたかと思うんです。これはまあ、こういう風な結論じゃあなくて、日本の近代というものがそういう流れを幾つかたどってきた、ということをもつて感じて頂ければ結構だと思つていたんです。ただ、これが果たして進歩だったんだろうかという問題がある、大体進歩だと思つていたんです、皆が。文章からいっても、もの見方からいっても、進歩があつたんだという風に思つていたんですが、途中からだんだん怪しくなつて、果たしてこれが進歩だったのかという疑いがでてきた。」

○第五回 十月二十一日・「森鷗外と明星派」・参加者十七名。

○第六回 十一月十八日・「万葉集と近代短歌」・参加者二十名。

○第七回 十二月十六日・「柿本人麻呂という歌人」・参加者二十名。

『鴨山の磐根し枕けるわれをかも知らにと妹は待ちつつあらむ』大体これが人麻呂の死んだ時の歌ということになっているものですから、誰でもこれに引掛かる。これ

○第八回

に最初に関心をもって長い「鴨山考」というのを書いたのが斉藤茂吉である。「鴨山はどこだ」ということを随分苦労して探して歩いていっているんですけど、あまり歴史的な根拠が明らかでない、茂吉の本はたいへん面白いんで、読んで行くと「今日はここが鴨山だろう」というように心に決めるまでに至った、次の日に歩いていたら「それは止めてこっちにしたら」なんていう、結局「鴨山をここに定めん」といつて定めてしまふのだが、どの位証拠があるか分からない。

○第九回

二月十七日・「夕暮、牧水の時代」・参加者十八名。

「前田夕暮のこの時の歌に『自然がずんずんからだの中を通過する山 山 山』というのがある。これはよかった。これは口語短歌の中で成功したほうなんです。飛行機から見た景色を歌うつてことが、どれだけ意味があるかってことは問題があるが、しかし仲々こうはうまく歌えない。(略)これは釈道空がひじょうに感心して夕暮の歌はここまでいった、ここから新しい歌が出て来るかもしれない、ひじょうに期待したのだが、どうもそこまでは行かなかつた。で、おしまいに戦後、文語に戻らなければならなかつたのは、夕暮の不幸であつたのです」

○第十回

三月十七日・参加者二十八名「これからの短歌」

これは私の「徒行」という歌集の最後の歌なんです、
『対象(もの)に触りいのちしづまるゆゑよしも説きがてぬまで身の壮り過ぐ』
というのがあります。子供の時は対象にぶつかると心が騒ぐ、花を見たりすると女人は何時までもそうなんです、
「ああ花が咲いている、綺麗だ」なんて大騒ぎする、まあそういう段階を過ぎると、対象にぶつかると、こっちが心がしーんと静まってくる。松の木が風に揺れていると、自分の日常の心騒ぎが静まって、対象の方に吸われているというんですか、対象の方に心が向くんですね。そういうこともどうも説明できない、説くことが出来ないほどに壮んな年が過ぎた。また年取つてくるとすぐに心が騒ぐ、それはこっちの心の衰えであつて、そういう壮年のものに触れた心が静まるということも、もはや遠くなつた、簡単に心が動く、まあ年を取るとすぐ涙を流したりするのもそうしたことです。そういう具合になつてきたということで、これは心境として言つてはわけじゃなくて、そういう清新の驚異として境として出してみようというのであります。これはまた私の歌の行き方なんで、清水さんとも勿論違ふが、塚本さん岡井さんともまた違ふので、まあ色々あつていいわけでありませう。



第36回 沼津牧水祭・短歌大会

平成²⁵年10月15日 — 若山旅人氏を講師に迎えて —



第三十六回沼津牧水短歌大会は、秋晴れの十月十五日、沼津軒八階大ホールに於て開催された。県内外から四百十八首の作品が寄せられ、短歌愛好者二百五十名の参加であった。

午前十時より須永秀生氏（東海短歌）の司会で、佐藤茂正氏（東海短歌主幹）、室伏侑氏（山脈短歌会代表）、上田治史氏（沼津牧水記念館副館長）の三氏が、「私が選んだ十首」について懇切な評と、選歌姿勢を語られた。

牧水祭草創期より歌会に携わってこられた佐藤氏、上田氏の豊かな選評は説得力があり、独自の歌論にも共感するところ、納得する部分が多く、参加者の拍手がそれを物語っていた。

須永氏のソフトな司会は、フロアとの交流をより和やかにし、新語や俗語の用法、固有名詞の効果的使用について、作品を例に具体的な問いかけがあり参考になった。

続いて午後の部では、若山旅人氏の総評があり、応募作品の幾つかについての批評と、十首選の講評が行われた。全体の傾向については、「作者の心や姿が表れ、うそがない作品が多かった」として「心が洗われる思いがした」と、感想を述べられた。作品づくりのアドバイスとして「自然現象への感謝の気持ちが大切」と結ばれた。

また、このたびの四百余首の歌の中で、選者、講師選の合致した歌はなく、複数の先生に採られたのは次の二首のみであった。

永年を夫が独りの鉄工場に子の加わりてポップス流る

（佐藤・室伏） 石田 宮子（焼津市）

瞬をひとつとしてより見開ける馬の目朝の碧空うつす

（佐藤・室伏） 芹沢 君代（沼津市）

この事に於ても歌の多様化は時代の流れであり、詩歌における価値基準、マニュアルは無いと言ってよく、選者の観点と己れの視点、表現方法の共感等を感得するのが歌会という祭りの場へ参加する意義の一つであろうか。

引き続き各賞の発表、表彰が行われた。

牧水賞（若山旅人選）

一席 光りつつ花によりいし揚羽蝶杉の暗みに入りて消えゆく

森嶋八重子（修善寺町）

二席 風吹くと見えねど白き夕顔は花ふるわせて其の位置保つ



三席 墓石を洗へば初夏の陽を浴びて温もりて来ぬ命あること
山本むめ子 (沼津市)

互選上位入賞は次の通り。

鬼千匹住まうわが家にうらうらと耳うす赤き嫁ご来にけり

久保美代子 (大仁町)

饞舌になりたる夫に帰省せる子はさりげなく酒を注ぎ足す

米山 笑子 (長泉町)

採算を言えば争いとなる畑に黙する妻と茄子の草引く

浅井不二雄 (沼津市)

永年を夫が独りの鉄工場に子の加わりてポップス流る

石田 宮子 (焼津市)

華やぎしあとの寂しさ花火師の使い果たせし闇ふかき空

浅井不二雄 (沼津市)

妥協せず一途なる娘の目の光り危ぶむまでの若さあふるる

山中さち子 (大仁町)

手に染みる機械油を長き時間洗ひみし子よ逢ひに行くらし

渡辺たつ子 (富士市)

(一名二首までの出詠可)

印象にのこる歌として (選者選)

へ橋づめの古きうなぎやいつとなく消えてこの夏変わりゆく町 貴田岡嘉枝 (梅

雨の間の畑に弾む声満ちてすもも摘む人見ゆ 中野萬智子 (一輪車の少

年も少女も夕焼けに頬染め入りみだれ走り来 川口和子 (立つ秋の朝の窓へに

われの身を吊すがごとくにブラウスを干す 入野早代子 (外があった。

結びに牧水会理事長林茂樹氏のご挨拶があり、午後四時過ぎ川口和子氏の閉

会の辞を以って、歌会を終了した。

付記のちの懇親会は三階和室に会場を移し、若山旅人氏、同令夫人 (美しく

上品なお姿にしばし睦目)、大林栄一理事、玉城徹氏も同席されて、なごやかな

歓談が続いた。

(高木絢子)

第36回沼津牧水祭・碑前祭・芝酒盛

平成 2 年 10 月 31 日 —— 千本公園にて ——

元 29



踊る花柳稔氏



若山富士人氏



賑やかな芝酒盛

若山牧水を偲ぶとともに沼津の文化について語り合おうという第三十六回牧水祭の一環としての碑前祭・芝酒盛が二十九日、千本松原の幾山河歌碑前で行われ牧水を慕う市民ら五百人近くが訪れ、在りし日の牧水に思いをはせていた。また「みなかみ紀行」の旅のコースとなった群馬県沼田市から約五十人が参加し、交流した。

碑前祭では、主催者である沼津牧水会の林茂樹理事長が開会のあいさつを行い次いで、杉田克己市教育長が「牧水が愛し、親しんだのは、千本松原など沼津の自然と市民の人間性。この牧水が終えんの地に選び、愛した沼津の自然を保存しようとした市民であり続けたいと思う。それを考えさせてくれるのが、この牧水祭」と祝辞を述べ、牧水の次男富士人氏がひょうたん徳利に入った清酒を歌碑にかけて献酒したあと、松原伐採反対運動で演説した父牧水の思い出話をしながら、「昭和三年に没して既に六十余年経つが、牧水祭という形で、牧水の血を引き継いでいてくれるみなさんに感謝します」とお礼の言葉を述べた。

引き続き、日本舞踊家の花柳稔師が長詩「枯野の旅」など牧水の詩、短歌の吟詠に合わせ舞った。

これで碑前祭を終え、芝酒盛に移った。松林に囲まれた歌碑前広場には、紅白の幔幕が張りめぐらされ刈り込まれた芝生の上に敷かれたゴザでは、親しい人同志が三々五々車座になって、煮込みおでんや焼きとりをさかかに、地元渡辺酒造の銘酒「牧水」を酌み交わしていた。

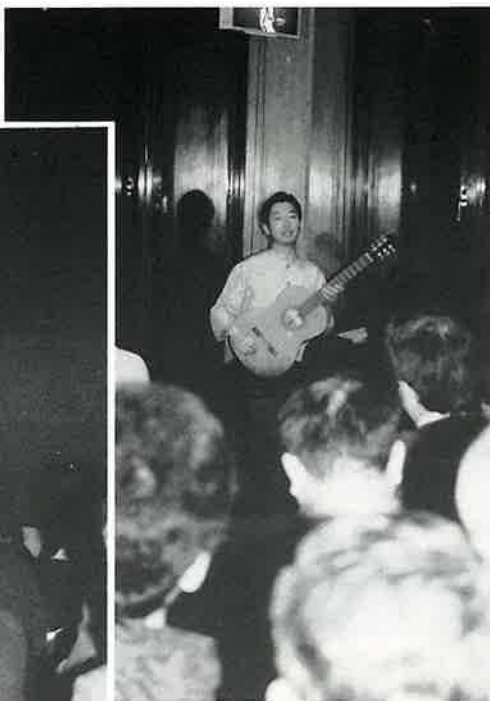
沼田市から訪れたのは、同市中央公民館主催の文学散歩参加者約五十人。同市近くにある暮坂峠の頂きには牧水の歌碑があり、昨年十月、沼津牧水記念館が行った「みなかみ紀行探訪の旅」で、同地の碑前祭に参加した答礼。公民館の文学散歩は牧水はじめ、川端康成、芹沢光治良、井上靖氏らの作品を理解するため、貸切りバスで沼津を訪れ、伊豆に一泊して帰った。

(沼津朝日より)

サロン音楽の夕べ

新春コンサート ソプラノ ギター
伊藤 叔 + 福田進一

1・1・27(土) PM 6:30
記念館ラウンジ



新春コンサートと銘打って久しぶりにコンサートが行われた。

今宵の演奏者はソプラノの伊藤叔さんとギターの福田進一さんの二人。伊藤さんはマンハッタン音楽学校卒業後ニューヨーク、西ドイツを中心に海外で活躍。2年ほど前から日本でも「伊藤叔と20世紀の音楽を楽しむ会」などを主催、オペラから現代曲、ゴスペル・ソングまで幅広いレパートリーをこなす。福田さんはバリ・エコール・ノルマル音楽院卒業後、数々のコンクールに優勝し、コンサート活動をしている。

伊藤さんは「シューベルトは皆様もご存知のとおり、六百とも八百ともいわれる歌曲を書きました。もちろん全部ピアノ伴奏なんです、その中でも明らかにギターを意識して書かれたものもあります。例えば今日演奏するセレナーデ、これこそ本当にギターならではないと思います。この曲を、ギターのように弾けるピアノ伴奏になかなか巡り逢えず、今夜ギター伴奏で歌えるなんてとてもステキです。」と話され演奏にはいった。会場は重厚で繊細な音楽に引き込まれていった。またたく間に時間が過ぎ、最後に「記念館にふさわしい曲でお別れを」と、牧水の「白鳥は〜」を歌って幕を閉じた。

雑の歌会

平成2年3月4日(日)

講師 春日真木子氏



平成二年三月四日第二回雑の歌会は、講師に「水麩」の春日真木子氏を迎え、八十名の参加を得て、会場を急遽、沼津俱樂部の広間に移して開催された。

県歌人協会高嶋健一会長、「水麩」榛名貢氏にも御参加頂き、主催の牧水記念館の上田治史氏より講師の御紹介、須永秀生氏の司会のもと、まれにみる緊張感の漲る歌会となった。

春日氏は八十九首の出詠歌のほとんどもに触れ、きめ細かく歯切れ良く鋭い切っ先を右に左に自在に、説得力ある批評で、会場を魅了した。

○既製の概念、観念から脱して欲しい、常識からどうはずれるかが現代性につながる。

○描写を適確に、観念的にまとめないで思いをほぐすこと。

○結論を言わないこと、わかりたがりやにならないこと。

○手触り、知覚でうたう、表現にリアリティを持たせる、事実のままでは詩にならない。

○よい作品はよい読者に出会って完成する。と、読み手によって作者の成り立つことを見事に立証された。

若山喜志子、大西民子の作品を引きながら身をこえてあふれる思いが詩であることを力説された。

白熱の批評交換が終り、庭の燈籠に明りが点された。興奮さめやらぬ会場に残った人三十名余りが、会席膳を囲みながらの歓談に移り、玉城徹氏も加わっての無礼講となった。

(高木絢子)

○春日氏選

夜の雨雪かき消すか苞葉を畳に落とす壘^し粟のひと花

渡辺たつ子

コンピューター技術に復原し給へる菩薩ゆるらに明日香の笑まひを

貴田岡嘉枝

村とよぶ器に燈る水あかりひとりの葬りに人は寄りあふ

久保田たか子



木と石とわれとやさしき山姥と包みて夜の雪降りしきる

吉永 初恵

ふる里に乗り替え告ぐる声流れ見知らぬ人ら一斉に走りゆく

古屋美智子

○問題歌

くもり日の昼の畑土ぬれし乾きし成りてくされる白菜いくつ

中島三知子

ふるさとの地場産業館のレストランお子様ランチをロボット
運ぶ

内堀 武子

男童のかへるのようによこれは水すましかも水の上をゆく

浅場 純子

社会鍋に紙幣一枚なげ入れてやすやす買いぬみずからの幸

高木三枝子

体振りて鳴らす鎖に縛の身と真夜告げてをりわが黒犬が

山梨 玲子

○互選上位

飼ひ兔にいつしか口利く自閉の子野にタンポポの花ひらく季

向笠 律子

わが問ひにうんとかすんとか言ふて欲し閉めし扉を指で弾き
ぬ

桜井 光子

霜降りし枕木白く浮き立つを一枚つつ沈め電車行き過ぐ

田伏三枝子

西ぞらの紺の高みを揚りゆき疾風の中に風は鎮まる

川口 和子

偶然に君に行き合ふ可能などいづこにもなき町をさまよふ

芹沢 君子

第2回特別展——筆跡による牧水周辺展



展示会場

若山牧水が登場する明治末期の歌の世界は、かつて経験したことのない激動の時期を迎えていました。日露戦争の終結により、文学を含めてあらゆるものが、新しい改革を迫られていたのです。例えば、それまで全盛を極めてきた与謝野鉄幹、北原白秋、吉井勇らを中心とした新詩社「明星」の影響力、即ち「夢見る我」を追及した浪漫主義的文学性が俄に色褪せてくるのです。明治三十九年頃には、尾上柴舟、前田夕暮、牧水らによって結成された車前草社の打ち出す自然主義的な風潮が注目され始めていました。また、反「明星」の旗じるしを掲げて前田夕暮が「向日葵」を発行しています。一方で森鷗外主催の観潮桜歌会が発足し、与謝野鉄幹、佐々木信綱、伊藤左千夫らが集まって、やがてここから雑誌「スバル」が創刊されます。四十一年に入ってから、「馬酔木」を継いで「アララギ」が誕生、その翌月には「明星」が、さながら浪漫主義の衰退を象徴するかのようになり、百号をもって廃刊になるのです。四十三年になって若山牧水編集の「創作」が創刊になり、一層自然主義的傾向は強調されます。つまり、日常的な平凡な題材、疲労と倦怠感、不安や絶望など、小市民的な立場にたつて歌を詠む、そういう姿勢が重視されてきます。この頃夕暮が歌集「収穫」を発行、同時に牧水は歌集「別離」を世に送ります。これが「牧水夕暮時代」という歌壇史上特記すべき短いけれど重要な一つのエポックをつくるのです。

短歌における近代は、明治四十年代の末から、短歌の源流である浪漫主義と厳しく拮抗することにより、確立したものと思われています。この歴史的な過渡期の様相は、若い牧水の周辺に焦点を絞って眺めてみても、かなりはつきりしてくるのです。

この度、当若山牧水記念館における特別企画「筆跡による牧水周辺展」では、主としてこの時代に参加した気鋭の歌人に光を当ててみました。遺品となった短冊等の筆跡からそれぞれの歌人の人柄を思い描き、また、その人脈の豊かさや相互交流の有様などを考え、近代短歌史上類を見ない華やかで荒々しかった開花期の状況に、遠く思いを馳せてみたいと存じます。

資料は明治末期から大正前期にかけ、「創作」の有力同人を含めて七十人(百十点を網羅しています。例えば、石川啄木が妹に当てた長男真一の死の知らせ。与謝野鉄幹夫妻や尾上柴舟の華麗な筆跡。「白秋の顔」について述べた岡本かの子の原稿。牧水の生涯の恋人として知られる園田小枝子の戸籍謄本。友人茨木猪之吉の絵に賛をした牧水の歌。若山喜志子の「屏風絵」。喜志子の妹、潮みどりの少女時代のスケッチブック。啄木の死を知らせる牧水の葉書等。これらは総て今回の特別展示に寄せられた、各界諸家の絶大なるご支援のたまものでありました。

(治)



菟志子屏風・川端康成・半折・
牧水旅姿・茨木猪之吉の半折

園田小枝子・戸籍



出品目録(一部)

短冊

うつりきて桜がうへにかかりつつ雨もつ月の影のとほしさ
向日葵は金の油をみにあびてゆらりとたかし日のちひさきよ
わがまえの川の半を白くして帆をうつしたる初秋の船
かまくらやみほとけなれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな
秋ははやさのねかたに水ひきのつぶさに紅しききにけるかも
寂しければ大徳寺にもゆきて見つ時ならぬ雪降るがまにまに
恋 あげがたのしましのねむり心ゆもおはぬ人のゆめにたちたる
かへり見て我に付き来る妻子らを春の大路に見つつさびしき
睡蓮の鉢にひそめるひきがえるけさもありけぬ葉のかげ深く
旅人のこゝろをけふもなげかせて大島が嶺に立つ煙かな
たみくさのこひのなげきに何しかも我大王は神去りたまふ

色紙

かどまつにしめをはりつつ年々にせめて一度はあひたしと思ふ
ローリングゆるやかに船は名月の津軽海峡をわたりつつあり
浅瀬なす野川に降りて浸す手のかたへにて吾が犬は水呑む

半切

「牧水記念館」
「茨木猪之吉の絵と牧水の賛」

葉書

若山牧水から平賀財蔵宛 明治四十五年四月十三日
石川啄木から三浦光子宛 明治四十三年十月二十九日

その他

若山喜志子 絵屏風
潮 みどり スケッチノート
園田小枝子戸籍
堤 達 男作ブロンズ像「牧水旅姿」

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 尾上 柴舟 | 前田 夕暮 | 与謝野 寛 | 与謝野 晶子 | 北原 白秋 | 吉井 勇 | 尾山篤二郎 | 窪田 空穂 | 土岐 善麿 | 太田 水穂 | 斎藤 茂吉 | 平賀 春郊 | 大悟法利雄 | 桜井 淑 | 川端 康成 | 茨木猪之吉 | 若山 牧水 | 石川 啄木 | 若山喜志子 | 潮 みどり | 堤 達男 |
|-------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条

この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条

この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一に置く。

第三条

この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もつて、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条

この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

第五条

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究

第六条

(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営

第七条

(3) 文学講演会及び文学講座の開催

第八条

(4) 文学に関する各種出版物の刊行

第九条

(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託

第十条

(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第十一条

この法人の会員は、次のとおりとする。

第十二条

(1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人

第十三条

(2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人

第十四条

(3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもつて推薦された者

第十五条

会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもつて会員となるものとする。

第十六条

この法人の入会金は、次のとおりとする。

第十七条

(1) 正会員 一〇、〇〇〇円

第十八条

(2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上

第十九条

この法人の会費は、次のとおりとする。

第二十条

(1) 正会員 年額 五、〇〇〇円

第二十一条

(2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

第二十二条

この法人の会費は、次のとおりとする。

第二十三条

(1) 正会員 年額 五、〇〇〇円

第二十四条

(2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

（理事長）林 茂樹
 （副理事長）大河原二郎 佐藤茂正
 （理事）杉山光男 上田治史 佐藤英之助
 河本與司幸 浅井 治 保坂輝夫 田中和男
 寺田桂子 川口和子 青木朝子
 （監事）四方一滌 八十濱俊一

（平成二年三月末日現在）

後記



平成二年四月一日より社団法人沼津牧水会の事務長に、山川浩啓（ひろあき）氏が就任いたしました。氏は本年三月まで沼津市門池小学校の校長の要職についておられました。今後は沼津市若山牧水記念館にあつて牧水会の事務的運営面を司ることになります。どうかよろしくお願いいたします。

第二回特別企画展「筆跡による牧水周辺展」は各界からの絶大な支援により予想以上に有意義な催しとなり、好評のうちに終わりました。これは特に左のみなきさまの積極的なご協力の賜物で、関係者一同深く感謝いたしております。誌上をかりて厚くお礼申し上げます。石川啄木記念館、盛岡てがみ館準備会、短歌新聞社・石黒清介、鈴木俊一、石井敏子、浦辺諦善、大悟法稔子、竹沢恒之、船水京子、若山旅人、大悟法利雄。（敬称略、順不同）